

初期禪宗における佛弟子の意義—祖統説の成立をめぐって—

内容概要

駒澤大學 程 正

周知のごとく、まさに「佛祖」という独特な呼稱で端的に表されているように、中國禪宗においては「祖師」が「佛」と同一視されていることから、禪宗における「佛弟子」の意義も、禪者とその弟子、すなわちこの兩者による師資の傳承のあり方を検証するによって明らかにすることができると考える。さらにいえば、禪者自身に及んだ禪の傳承がいかに正統性のあるものであるかを世間にアピールしていくことが、極めて重要な鍵となるのである。

一般に禪宗におけるこうした師資相承の傳燈系譜は、祖統説と呼ばれ、それは特定の經論を據り所とせず、「不立文字、教外別傳」を標榜する禪者にとって、自身に及んだ佛法の正統性を立證するためには缺かすことのできないものなのである。ただ、それを主張するにあたっては、種々の条件が設けられていて、しかもそれらは時代の要請に應じて變化していった。従って発表者はこうした条件の變化にこそ、初期禪宗における「佛弟子」に対する考え方の變化を垣間見ることができると考える。本発表においてはおもに東土（中國）の祖統説に焦點を絞り、従來の禪宗史研究ですでに論じられてきた問題ではあるが、あえて「佛弟子」という視點から、初期禪宗の祖統説の成立について考察を加えることにしたい。従って、本発表では小論では「佛弟子」を、禪宗における正統性を有する「傳承者」に置き換えて用いることもある。

具體的には、まず北宗系の『唐中岳沙門釋法如禪師行狀』、『楞伽師資記』、『傳法實紀』などを資料に、初期禪宗（北宗）の祖統説にみられる特徴を明らかにし、その後六祖慧能の弟子である荷澤神會の北宗批判の記録とされる『菩提達摩南宗定是非論』を中心に、祖統説に關する神會の主張を紹介した上で、その根據とされるものを検証し、その「虚實を取り混ぜる」という手法について論じつつ、祖統説の成立における神會の果たした役割を明らかにしていく。さらに神會の主張にあった缺陷とみられるものを洗い出し、後の禪宗においては、こうした缺陷がいかに克服されていったかについても考察を加えることにしたい。

キーワード：初期禪宗 祖統説 荷澤神會